

# Thomas Garter の *Susanna* (1578)

## についての覚え書

山 田 昭 広

Thomas Garter の作品 *Susanna* の古版本が発見されたのは、ごく最近1936年のことである。それは Leicestershire にある Beaumont 邸の Coleorton Hall の蔵書のなかから発見された。その翌年、Evans と Greg の協力によつて、それは編纂され、“Malone Society Reprints” の一つとして公刊された。<sup>(1)</sup> 現在、われわれに利用できるテキストはこれだけである。

*Stationers' Register* によれば、1563年に印刷者 Colwell が8篇の ballets と一緒に「信心深く、貞淑で、聡明なスザンナ」(‘the godly & cōstante wyse Susāna’) を登録した事実がある。しかし、われわれの *Susanna* は play と呼ばれるのにふさわしい作品であるから、この1563年の ballets の登録が実際にわれわれの *Susanna* の登録であつたかどうかは疑わしい。一方、*Stationers' Register* の1568—9年の中ほどのところに、Colwell が「劇スザンナを印刷する許可をとるために」(‘for his lycense for pryntinge of y<sup>e</sup> playe of susanna’) 登録料4ペンスを支払つていることが明記されている。<sup>(2)</sup> しかし、彼がこの作品を実際に出版したかどうかは明らかでない。そのような事実を伝える資料は何も残つていない。いずれにしても、Colwell は1575年に死没し、その妻は Hugh Jackson という男に再婚している。この結婚で Jackson は Colwell の印刷所を所有することになり、われわれの作品「この上なく仁徳高く信心深いスザンナの物語り」(*The Commodity of the most vertuous and Godlye Susanna*) を出版した。その扉表紙に「まだ印刷されたためしのない」(‘never before this tyme Printed’) と Jackson は言明しているが、もしこのことばがそれ以前の刊本のことばを不注意に再版したのでなければ、Colwell は死没前に獲得した版權を利用しなかつたことになる。普通ならば、版權登録後程なくして公刊を見るものであるが、Colwell が数年(場合によれば十年ほども)のあいだ版權行使をしなかつた理由が何であつたかは推量さえもできない。

作者 Thomas Garter についての確実な史実は何も明らかにされていない。Malone Society Reprint の編者たちは

「Sir. William [Garter] には二人の息子があつて、一人を Bernard, 他を Thomas と呼んだ……。劇 [*The Tragical and True History that Happened between two English Lovers, 1563*] を書いたのは兄の Bernard だと考えるのが自然であるから、スザンナについて書いた Thomas はその弟であつたかも知れない。<sup>(4)</sup>」

という推定をしている。この推定がはたしてどれほど真実に近いものかは全く疑わしい。し

(1) B. I. Evans and W. W. Greg (ed). : *The Most Virtuouse & Godlye Susanna by Thomas Garter, 1578*. (The Malone Society Reprints 1936 (1937)). Oxford : Malone Society, 1937.

(2) *Susanna*, ed. cit.

(3) Cf. Arber, i 383.

(4) *Susanna*, ed. cit., vi.

かし、この Thomas Garter という作者は恐らく Oxford に関係した人であつたであろうし、また恐らく法律を学んだ人であつたであろうと思われる。この作品に法律へのおびたらしい言及があるばかりでなく、<sup>(5)</sup> Oxford への特定の言及 (l. 1351) さえもあるからである。

創作年代についても確実なことは何もいえない。この作品の納め口上は慣習的な祈願、「われらが気高き女王のために」(‘for our most noble Queene’ (l. 1434)) となつているが、この「女王」は時代的には Mary でもよいし Elizabeth でもよい。前述のように、Colwell がこの作品の版權登録をしたのがもし1563年であつたとすれば、創作年代はさらにそれ以前に溯ることができるであろうから。

どのような劇団によつて、当初上演されたか、少くとも上演される予定であつたか、これもまた確かでない。可能性としては二つ考えられる。第一に、法律学生つまり少年劇団。法律への言及で終始する作品だからである。第二に、より可能性あるものに、Court Interluders そのほかの大人劇団。そのような印象を与える言及が多いからである。即ち、‘this Hall’ (l. 59) とか ‘this court’ (l. 983) という言及があつて、上演場所を指摘しているし、‘my maysters’ (l. 88) とか ‘you wiues’ (l. 161) とか ‘your busbandes’ (l. 162) とか ‘you Maydes’ (l. 167) とかいう言及があつて、劇客の構成が一般社会的というよりはむしろ家族的単位を基礎にしていることを暗示しているし、何よりも「宮仕えの身となりました」(‘I came into the Court’ (l. 612)) と身の上を語る侍女への言及があつて、宮廷というものを観客に強く印象づけようとしているからである。しかし、いずれにしても、劇団の性格ははつきりしない。

扉表紙につけられた17人の登場人物の一覧表には、「8名で容易に演ずることができる」(‘Eygth persons may easily play it’)<sup>(7)</sup> と説明されている。当時の戯曲の多くがそうであるように、この説明にも拘らず、Garter の人物の割付けは4個所で混乱を招く。即ち、835—52行での True Report=Helchia, 1112—1404行での Susanna, 1251—1381行での Voluptas=Devil (扉表紙の一覧表では ‘Sathan’), また、1382—1404行での Servus=Uxor (Helchia の妻) と True Report=Helchia の場合であつて、これらの個所では一人二役はできない。しかし、こうした混乱も実は stage directions が完全でないから生じるものと思われる。筋の運びには何らの混乱も認められない。いずれにしても、これらの混乱は登場人物に「退出」(‘exit’) の stage direction を与え忘れていることに起因している。即ち第一の場合、その direction は835行のところで True Report に与えられるべきであり、第二の場合はそれが1216行のところで Susanna に与えられるべきであり、また第三の場合、処刑された Voluptas は望ましくは処刑された Sensualitas と一緒に運び去られるべきである。また第四の場合 ‘exit’

(5) たとえば, ll. 320-29, 437-40, 492-8, 516-25, 949ff, 995, 1300ff, 1320-21および1349-55.

(6) ここで ‘this court’ は法廷 (‘court of Justice’) をも意味している。

(7) ついでながら、この但し書きの説明は劇団の性格との関連で一応興味深い。即ち、総計8名という数は Court Interluders が1516-1559年の期間に亘つて保持し続け得た人員定数と同じであつて、この作品の創作年代の推定がもし1563年以前に溯り得ることになれば、この劇団と作品との関係が可能性をもつことになる。困みに、この劇団は1559年以後、宮廷での上演という特典を失い、次第に消滅していった (cf. E. K. Chambers: *Elizabethan Stage*, ii. 79-84)。Thomas Garter が登場人物をこのように8人の劇団で上演できるように割付けたこと自体は珍しいことでなく、当時の戯曲一般に共通する現象で、一つの慣習であつたと思われる。しかし、Garter の割付けは、比較的に注意深い責任あるものであつて、この点、他の戯曲の場合といくらか趣きを異にしている。

の direction が1382行のところで、望ましくは True Report および処刑された Ill Report と一緒に、Servus に与えられるべきであろう。これらの stage directions を導入することは決して不可能ではない。そうすることによつて、現在のテキストから生ずる混乱を、至極容易に取除くことができる。いずれにしても、これらの混乱は小さな directions がテキストに記入されていないことから起るもので、実際には容易に調整され得るものであろうから、恐らく少くとも 8 名で構成された当時の劇団によつて上演され得たに違いない。Malone Society Reprint の編者たちは、Ill Report に関して混乱が一回生じると考え、「Ill Report は、Crier の職務を遂行する場合 (952, 955, 977行) でさえも、その名前と性格を留めている<sup>(8)</sup>」と書いている。しかし恐らく作者は Crier に関してのそのような混乱を混乱だと考えていなかったのであろう。看守の Gayly が Ill Report に Crier として 'an O yes' を高叫するよう依頼しているからである (l. 952)。さらに、恐らく作者の意図では、Ill Report をして、儀式的な 'O yes' のもじり——Vice である Ill Report 自身の考えに従つたもじり——を述べさせて、一つの社会諷刺を試みようとしたのであろう。もし、この作品に本当の混乱があるとなれば、小さな所作上の混乱が一つあるだけである。即ち、Voluptas から既に外套を無理矢理奪い取つた Ill Report (l. 140) が、Voluptas と Sensualitas の「外套の一つを着服する」('putteth on one of their Gownes' (ll. 1253—4)) ところである。これとて、実際には簡単に調整される混乱であろう。

この作品において、衣裳への言及がすべて緋色の外套であるのは不思議といえば不思議である<sup>(9)</sup>。Ill Report, the Vice がそれを着る。Ill Report は Voluptas 或は Sensualitas の代表する「判事」('Judges') から外套を奪う (ll. 1140—43, 1253—4)。Servus に名前を問われて、Ill Report は答える——「拙者は判事じや、この外套を見てわからぬかい？」('I am a Magistrate, doest not see by my gowne' (l. 1284)) と。このことばで、この劇のこの Vice がどんな外套を着ていたかが明確になる。一般に Vice の服装が問題となつていだけに、この一行は貴重な evidence を提供している。

音響効果に関して三つ明瞭な言及がある。即ち 'the leaden Trumpe' (l. 180), 'the clock' (l. 644) および 'a Bell' (ll. 905, 911—12) である。

ごく普通の、たとえば、'a Chayre' (l. 51) とか本がのつている 'a Table' (ll. 330—31) というような、道具類は別として、この作品には奇妙な道具類がある。'the stake' (l. 1223) とか処刑用の何らかの構造物 (ll. 1382—3) がそれである。一番大きい道具類は恐らく果樹園の场景 (ll. 672—775) に描写されているものであろう。Craik がいうように、「[舞台の] 前部から後部に向つて走る間仕切りによつて二分された演技の場所を考えてはじめて<sup>(10)</sup>」この場景の理解が可能になる。しかもテキストによれば、「果樹園の戸口」('the Orchard dore' (l. 699))がある以上、この間仕切りはその戸口つきの果樹園の囲い壁になるわけである。しかも、それは何か実際の構築物であつたに違いない。そうでなければ、Serva に向つて Ancilla

(8) *Susanna, ed. cit.*, vii.

(9) 即ち、'bloody gownes' (l. 174), 'for all your bloody gowne' (l. 529), 'a bloody gowne' (l. 1142), 'the Vyce putteth on one of their Gownes' (ll. 1253—4), 'in yonder scarlet gowne' (l. 1275), および 'by my gowne' (l. 1284).

(10) T. W. Craik: *The Tudor Interlude: Stage, Costume, and Acting*. Leicester University Press. 1958., 17.

がいうことは「ドアを足で蹴つてみてごらん」(‘Proue with your foote, if that the Dore…’ (l. 702)) というのも実演できないだろうし、また stage direction が明示する所作「二人の召使いが……走り出て、果樹園の戸口をはげしく開ける」(‘two seruauants…run out, and breake open the Orchard dore’ (ll. 774—5)) というのも実演できないであろう。この場景についての説明のなかで Craik は次のように書いている。

「二分されたこの」舞台の一方は果樹園を描き出すためにのみ使われることは明らかであるが、もう一方は種々の目的のために使われ……[330行の] ‘a Table’ ……[1223行の] ‘stake’などを置く。……この戯曲の上演方法の面での主たる重要性は、多分木摺りと粗布でつくられた壁という手段に訴えて、形式的に「場所」の区分をしていることである。<sup>(1)</sup>

全くその通りであろう。しかし、同じような構造物はこの戯曲よりも以前に使われたらしい事実がある。即ち *Gammer Gurton's Needle* 第四幕四場がそれである。そこでは Diccon が Doctor Rat をだまして、壁穴から Dame Chat の「家のなかに〔忍び込ませ〕、だしぬけに家人のまえに躍り出させる」(‘Into the house, and suddenly anawares among them leap’ (IV. iv. 32))。 *Gammer Gurton's Needle* のなかのこの説明でわかるように、舞台は少くとも高低二段式になつていなければならない。*Susanna* にも、同じような舞台を暗示する個所が二つある。即ち、955—7行と1099—1100行の部分。Ill Report は、‘O yes’ を Crier 代りにしてほしいと頼まれるとき、‘O yes’ を誦えるにふさわしい場所へ昇ろうとして、「手を貸して呉れ」(‘Help me vp’ (l. 957)) という。これは舞台にかなりの高低差をもつた部分——恐らくは何らかの構造物——があつたことを暗示している。また、stage direction に「神がダニエルの霊を出現させる」(‘God rayseth the spirite of Danyell’ (ll. 1061—2)) というのがあるが、果して Daniel が舞台上でどんな仕草をしたのかよくわからないとしても、舞台上に何らかの構造物があつて Daniel のための高座を示したと考えるのが自然であろう。

テキストには幕場割り (act-scene division) は施されていない。Prologue と Epilogue がついている。この Prologue と Epilogue の重要性は、作者がそれらを物語りの梗概を述べる場所として利用しただけでなく、この場所に乗じて一つにはひいき方の愛顧をねがい、もう一つには作者の文学論ともいべきものを披露しているところにある。登場した Prologue は

これよりお目にかけますは、作者はじめての発表作、

美しいキケロのことばには及びませぬが、よろしくご笑納遊ばしませ。

(though with Bullus Tully style, our Authour doe not frame,

This his fyrst worke which you shall heare, yet do accept the same. (ll. 3-4))

と述べ、次いで、いわば作者の版權を主張し、

物語りの性はよろしく、話しのたねもまことそのもの、

いかにも古いたねではございますが、手直しいたしましたゆえ。

(For why the Story being good, the matter also true,

Doth but declare a matter olde, as it were done anew. (ll. 5-6))

とことばを続ける。これが扉表紙の ‘Compiled’ ということばの意味であろう。それはとにかく、Prologue は、教訓を目的とする、という伝統的な演劇観を代弁して

時にはみだらなことばも、軽薄な身振りもとび出しまして、

(1) *Op. cit.*, 18.

或はふさわしからぬこともございまいしょうが、そこは聡明なお方々のこと、  
 厳肅な話しのたねは、底抜けの笑いと交りあつてこそ、  
 この上なく快く人の心の重荷を取り除くものと覚し召せ。

(though perchance some wanton worde, doe passe which may not seeme  
 Or gestures light not meete for this, your wisdomes may it deeme,  
 Account that nought delightes the hart of men on earth,  
 So much as matters graue and sad, if they be mixt with myrth. (ll.16-9))

と語る。Epilogue ではこの戯曲に「唄と音楽」(‘musicke song’ (l.1446)) の慰安のなかつたことを弁解し、もう一度ひいき方に愛顧をねがう――

はばかりながら、もしやこれに性懲り遊ばせずば、  
 類似の作をもうひとつ一心に物すがよい、とお仰せ下さいまし。  
 ここでお気づきのこともは、よろしくお教え下さいまし。

(if our Authour may perceave you take this in good part,  
 To doe the lyke you comfort him, agayne with all his hart.  
 If any thing hath bene amis, informe him if you please. (ll.1448-50))

この Epilogue をきくと、Elizabeth 時代の劇作家が熱心に patron を求めたのを思い出さないわけにはいかない。果して Thomas Garter がそうしたことに成功したかどうか全然わからない。

しかし、生涯はじめての作品をつつがなく発表しようとながう人にふさわしく、作者は入念な stage directions を用意した。それらのおかげで、筋の運びや舞台上の動きがわからないことはほとんどない。

作者の versification は、これまた、非常に快いものであり、規則正しい。当時の典型的な versification に iambic heptameter rimed in couplet というのがあるが、Garter のも大部分それによつてゐる。既述の如く、役者はいくつかの人物の役を重複してやるように予定されているが、これらの登場人物(又は役者)のせりふと versification との間には特別重要な関係もないように思われる。しかし、最初の284行ばかりの versification はいくらか趣きを異にする。他の部分とは全く違つてゐる。作者は、この作品を書き出したとき、versification に特別の考慮を払つたものようである。なかでも興味あるのは Vice のせりふで、そのうちでも特別に入念な例は次のものであろう。

I thinke thee mad to be,  
 How say you all, within this Hall,  
 What Knaue more crookte then he,  
 Why you shitten slave, you crookte nose knaue,  
 What are thy wittes now past.

[大意] お前はキの字のようだね、  
 この大広間の皆さん、いかがです、  
 こんなにふれた男はいますまいね、  
 えい、この糞たれ、曲り鼻の漬たれ、  
 脳味噌の樽底が抜けたんか。

しかし、作品全体としては単調な versification で終始する。

ほとんどすべての Tudor Interludes におけると同様、この作品においても Vice の III

Report はその古い系譜を披露する。彼は Satan の「悪賢い子供」(‘a crafty chylde’ (l.43)) だといわれる一方、自らその古い家系を誇らしげに語る――

俺の子孫を見てわかるように、  
俺の家系はものすごく古いんだ、  
どれほど古いかつて誰にも分かりつこなした、  
地獄の悪魔より少くとも七つは年上だからね。  
(it is seene by my progeny,  
That my aunckyent stocke is of great antiquitie,  
How olde it is none of you all can tell,  
Seuen yeares elder at the least then is the Deuill of Hell. (ll.139-142))

いくらかの interludes では Vice には兄弟があるものようであるが、この *Susanna* でも Ill Report は看守の Bayly と呼ばれる兄弟をもっている。Bayly は Ill Report に向つて、  
「昔は二人とも悪漢の間柄」(‘we were both knaues’ (l.931)) といつたり、また

いや、いや、友人かつまた兄弟だ、  
悪漢は悪漢、君がその一人だ。  
Nay, nay, my friend and brother,  
A Knaue is one, and you are another. (ll.1257-8)

といつたりする。この作品の Vice は、他人の衣服を失敬して変装したり、またそうすることによつてとりわけ異つた外観を見せびらかすことができるのを得意がつたりするが、<sup>(12)</sup> そのような所作から、彼が慣習的な典型的 Vice であることをうかがうことができる。

*Susanna* の侍女の出る短い場 (ll. 611-45) もまたこの作品の慣習的な特性の一面を物語っている。この短い喜劇的な場は、他の interludes において低俗人物の登場する類似の場面と同様、<sup>(13)</sup> 作者の創案になるもののように思われる。Craik によつて既に指摘されているように、<sup>(14)</sup> 宮廷生活のたのしみ多いはなやかさを憧れ、その夢を打ち砕かれた侍女たちの不平は、この *Susanna* の物語りの素材が提示する Palestine についての不満ではなくて、この作品の発表が恐らく予定されていた宮廷社会についての不満であることは面白い。この種の時代錯誤を犯してまで、この場景を導入した作者の意図はどこにあつたか。恐らく、作者は単純な気持で interlude というものの慣習的な形式に従つたのであろう。恐らく当時既に、interludes はそれ自身の形式を生みだし得るほどにも発達しており、ヨーロッパ大陸の文学的影響からかなり自由になることができていたのであろう。

(12) 即ち、次のような場面がある：

I hope to haue thy cote,  
And for exchange there of thou shalt be strangled in a rope.  
Mary syr a bloody gowne vpon my back, will make me look a hye,  
And then that I am Ill Reporte, no worldly man can spy. (ll.1140-43)

または、

I am a Magistrate, doest not see by my gowne. (l.1284)

(13) 一例をあげれば、*The Disobedient Child* における少年の場は、この作品の素材となつたラテン語の物語りのなかに、呼応するものを見出し得ない。

(14) Craik, *op. cit.*, 23.

このように *Susanna* には慣習的な形式主義がありありと感じられる。また、素材が聖書のなかの物語りであるだけに当然聖書に出てくる人物名が多数あらわれ、それに加えて、*Voluptas* とか *Sensualitas* というような教訓的な初期の interludes の匂いの強い抽象的な名前もあらわれる。それにも拘らず、Thomas Garter の *Susanna* はそのような中世的な抽象された観念を取扱った劇ではない。この作品の前半は、主として、初期 interludes によく見られる論議という形で、抽象的な登場人物によつて運ばれているのに対して、その後半は、とりわけ低俗人物の支えのもとに、ほとんどすべての登場人物によつて、いくらか劇的な効果を生みだしながら、運ばれている。いくつかの stage directions が示しているように、劇の進行はときどき farce 的要素を帯びることもある。処刑の場というものは陰惨な感じを与えるものであろうが、この作品の処刑の場——Elders の処刑——は Vice とその「兄弟」の看守のいたずらによつて戯画化されてさえもいる (cf. stage direction, ll. 1251—6)。これら二つの処刑の場 (ll. 1251—6, 1367—83) やその他の喜劇的な場<sup>(16)</sup>を別としても、*Susanna* にはいくつもの小さな見せものの滑稽な場景がおり込まれている。聖書物語りのなかから、教訓的なものを抽出したというよりも、むしろ、人をたのしませるような場面を作者は描こうとしたといえるであろう。既に引用した Prologue のなかにも、そのような作者の意図がうかがわれる。*Susanna* は、このように、喜劇にふさわしい演劇形式や諸要素を備えているので、中世の morality plays というような範疇から脱けだしている。それはまた、未発達の状態においてではあるが、後世 Elizabeth 時代の進展につれて成熟することになった Elizabeth 朝特有の明かるい farce 的要素の多い realism の精神に近づいているということもできる。

心覚えのためにさらに二つ三つの点を書き留めよう。古典への言及は湯浴みする Artemis を Actaeon が垣間見るといふもの (ll. 658ff.) と Pluto へのもの (l. 1129) と二つある。恐らくは当時の腐敗した司法官への言及 (ll. 837—40) があり、また諷的な表現は数箇所におり込まれている (ll. 194—5, 199—204, 291—4, 303, 356, 645, 721—3, 854, 1130)。

〔附記：いわゆる interludes という一群の劇作品の研究がなおざりにされているので、筆者はそれらの作品一つ一つについての問題点を指摘し、できれば interludes 共通の現象をつきとめてみたいと思っている。この覚え書きはそのような計画のために用意されたものである。〕

(15) 即ち, ll. 774-5, 1251-6, 1367-8.

(16) 即ち, 侍女の場 (ll. 611-45), 果樹園の場 (ll. 672-773) および教訓的な目的にも適う長い法廷の場 (ll. 835-1215) など。